



ブロックを撃ち抜く上越総合技術の松本。絶対エースとしてのプライドは見せた



(上)今年の東京学館新潟は守備力の高さが特長。最後まで諦めないプレーが勝利をもたらした
(右)坪谷のスパイクが相手ブロックに吸い込まれ、逆転で第2セットも奪取



前々回の春高県予選で勝って以来の県制覇に、選手たちは喜びを爆発



決める！
運命の球
高校バレーボール

全員バレーで東京学館が
2年連続13度目の優勝

2023.1.28-30
新発田市カルチャーセンターほか

新潟県第43回 高校1・2年生大会

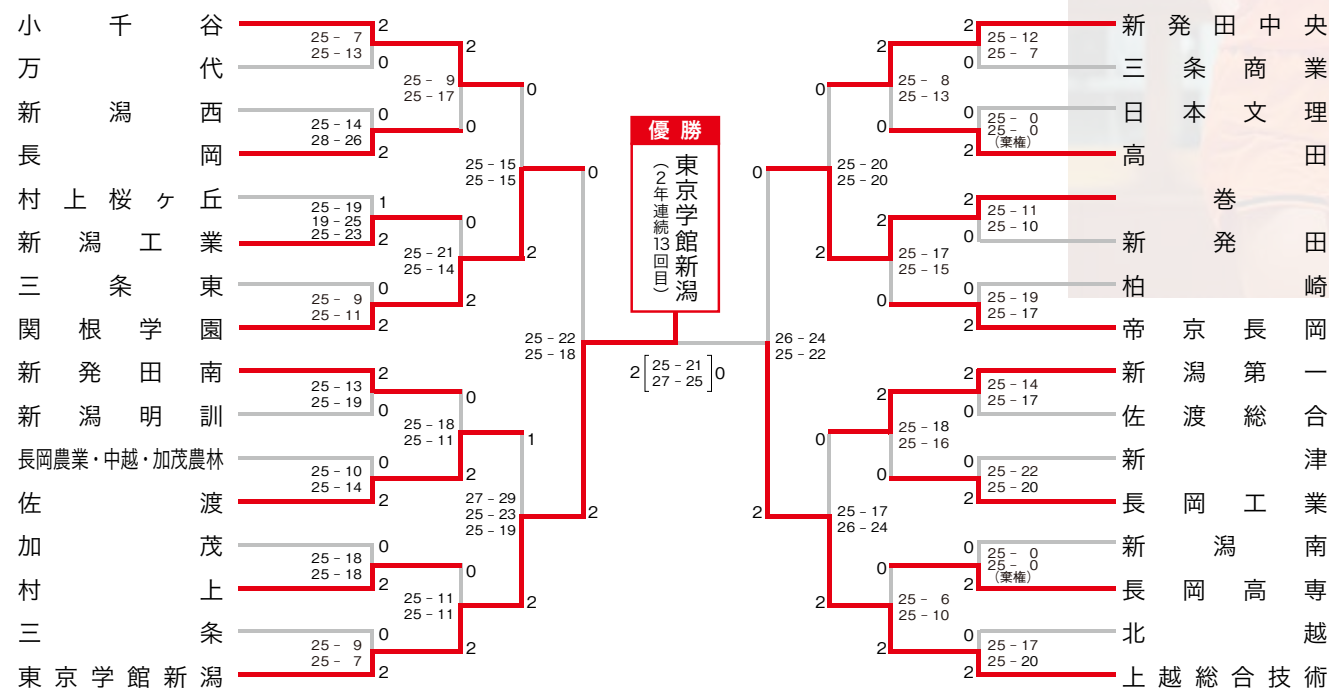
男女共に現段階で県の2強とされるチーム同士の決勝戦。男子は東京学館新潟が第41回大会に続く連覇。女子は新潟中央が11年ぶりに栄冠を勝ち取った。(昨年度大会はコロナ禍により中止)。

撮影●嶋田健一(スタジオ嶋田)、井上和男(編集部) 文●井上和男(編集部)

男子 決勝

東京学館新潟 2 [25-21, 27-25] 0 上越総合技術

東京学館新潟はエースの皆木海人(4番、2年)を中心に、攻守で粘り強く戦った



準優勝	第3位	第3位
上越総合技術	巻	関根学園

坪 谷陽向(1年)のスパイクが相手ブロックに吸い込まれた瞬間、大会史上最多となる13度目の優勝が決まった。メンバー全員がコート駆け回って歓喜した。

「自信につながる」。渡辺健太郎監督も、キャプテンの高橋快(2年)も口をそろえて言った。

ストレート勝ちとはいえ2セットとも接戦。第2セットではセットポイントを握られながら27-25と逆転した。

相手は絶対エース松本太一(2年)を擁する上越総合技術。昨年の春高バレー県予選準決勝で1-2と敗れている。その前の県総体も決勝で敗れ(1-2 新発田中央)、昨年は1度も頂点に立てなかった。

これまでに県総体13回、春高県予選(県選手権)14回の優勝歴を誇るチームにとって、自信を取り戻すために何が何でも勝ちたかった。

「全員が拾って全員が打つことをベースに、守備からリズムを作り出す(渡辺監督)のが今年の新チームの特徴。決勝でも上越総合技術の攻撃を粘り強く拾うシーンが再三見られた。

「今年は、例年に比べて守備のできるチームです。サーブレシーブが特に優れている。優勝できた自信をバネにして、インターハイ、春高(の予選)を勝ち切って全国大会に出場します」(高橋)

敗れたものの、上越総合技術は春高で全国大会を経験した選手が残り、夏までに巻き返してくるはず。今大会ベスト4に残った関根学園、巻、そして準々決勝で東京学館新潟にフルセットで敗れた佐渡も悔れない。

セツト終盤で明暗 新潟中央が 11年ぶりに頂点

新 潟中央は春高バレーを戦い終えて1月9日に帰郷。「3年生が抜けて」相当大きな穴。勝つ要素が見えなかった」（佐藤淳司監督）と、調整が十分ではない状態で臨んだ。佐藤監督と選手自身にとっては新チームがどんなポテンシャルを持っているのかを推し量るための大会であり、決勝戦だった。

第1セットの新潟中央は、左利きの星野柚（2年）が繰り出すスライスを効いたサーブなどで相手レシーブを崩して序盤をリード。長岡商業のセッター外山杏奈（2年）の華麗なトス回しに翻弄されて一時追い付かれたが、終盤で突き放した。

第2セットは、長岡商業の拾ってつなぐ粘りのバレーの前に新潟中央は序盤で4点リードされる。しかし、再びサーブが決まり出した中盤、16-16と同点に。そこからお互いが持ち味を発揮しながら一進一退の攻防となった。終盤、肝心な場面でサーブミスを出した長岡商業に対し、新潟中央は大塚彩葉（2年）のクロススパイクで23-20。そして24-22から再び大塚のスパイクが決まり、セットカウント2-0で11年ぶり2度目（昨年度大会はコロナ禍のため中止）の優勝を果たした。

新潟県 第43回 高校1・2年生大会

女子 決勝

新潟中央 2 [25-22
25-22] 0 長岡商業

小田嶋美月(2年)が相手スパイクを止める。
「ブロックが効いていた」(佐藤監督)



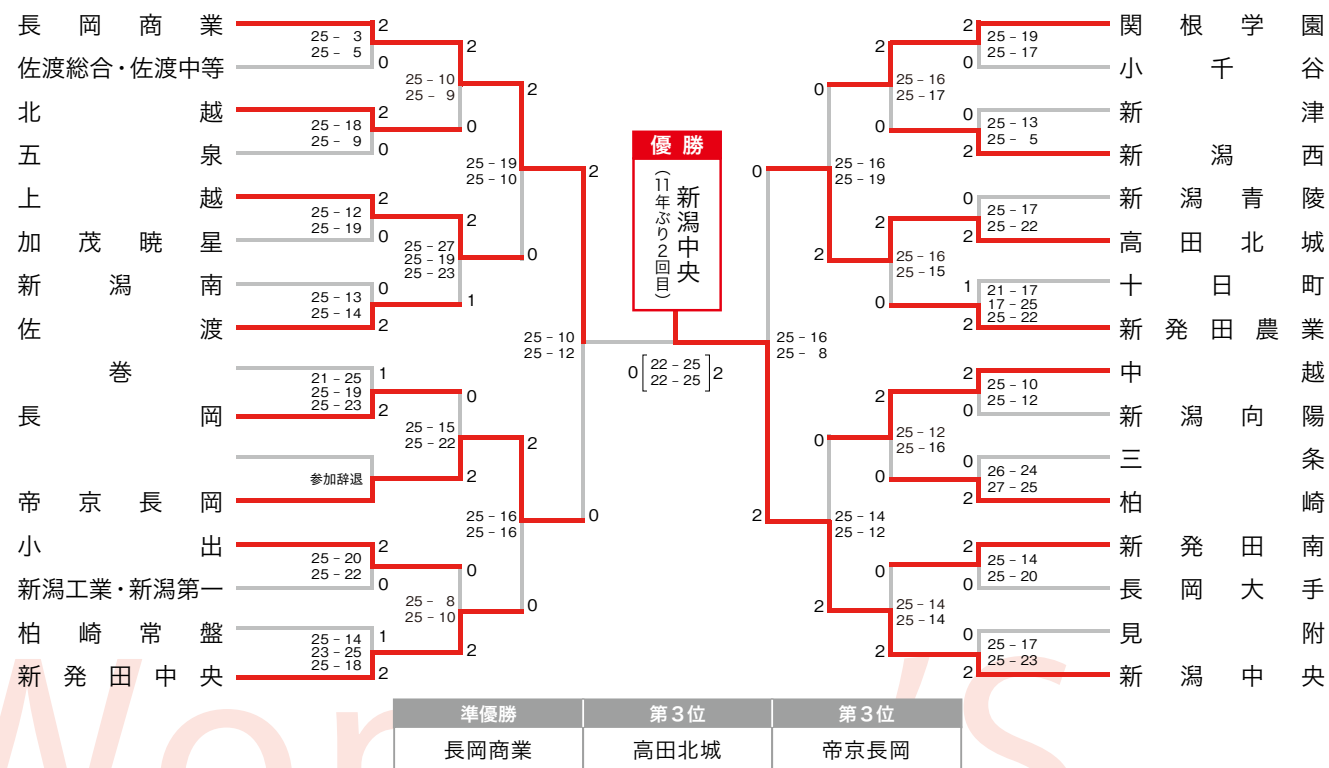
熱いキャプテンシーでチームを鼓舞した遠藤葵(2年、1番)。



(上)11年ぶりに優勝を決めた新潟中央。「最後は自分が決めてやる、自分に持って来いって感じてした」と、大塚はスパイクを決めた右手を挙げて歓喜。(右)長岡商業のセッター外山杏を中心に食いつがったが、1歩及ばず

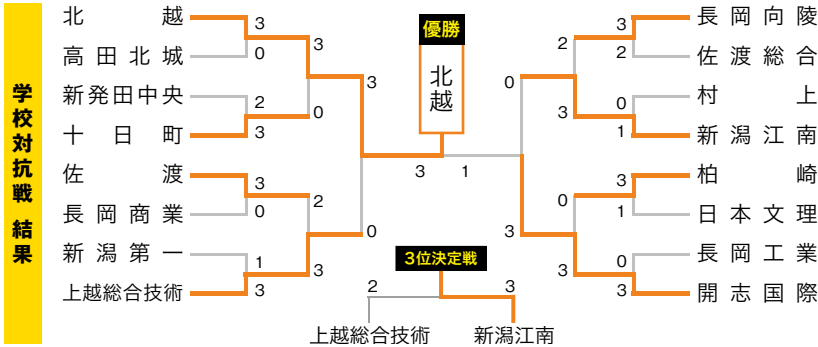


第2セット24-22から大塚が決勝のスパイクを決める





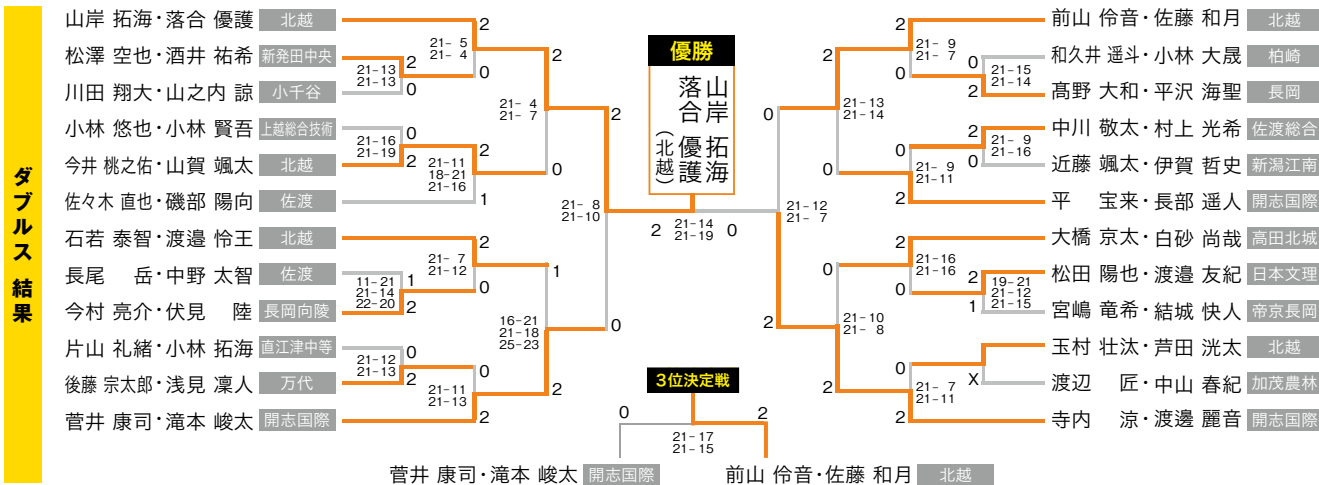
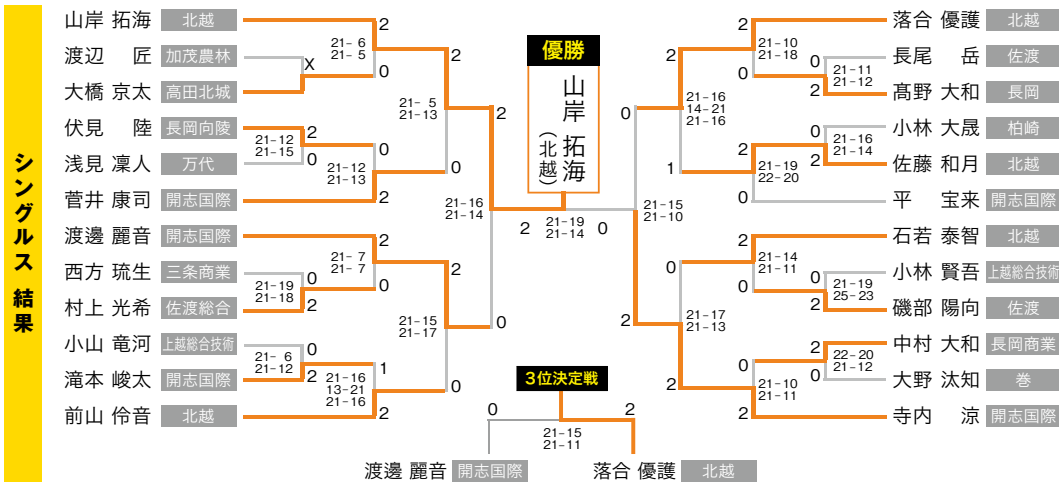
ダブルス準優勝の寺内涼(右)と渡邊麗音(左、共に2年)。北越最強ペアとの力の差はなく、今後も頂上決戦を繰り広げるだろう



「(試合の)流れが良かった」。因縁のペアに完勝し、優勝を決めて落合が吠えた



山岸は県選抜後に開かれた北信越大会でも県勢初の3冠に(写真は県大会)



決めろ！
運命の二球
高校バドミントン

[2022.12.24-26 / 新潟市亀田総合体育館]

新潟県第51回 高校選抜大会 兼全国高校選抜大会新潟県予選

51回目を迎えた県選抜大会は、3日間にわたり学校対抗戦、個人対抗戦のダブルスとシングルスが行われ、男子は北越、女子は開志国際が全種目で優勝を成し遂げた。

撮影●嶋田健一(スタジオ嶋田)

文●井上和男(編集部)



落合(手前)が粘って拾い、山岸(奥)が決める。ダブルス決勝も得意パターンが冴えた

学

校対抗戦、個人対抗戦ダブルス(複)とシングルス(単)の全種目制覇を狙っていた北越にとって、鬼門は大会2日目のダブルスだった。

北越の山岸拓海・落合優護ペア(共に2年)が決勝で相まみえたのは、開志国際の寺内涼・渡邊麗音ペア(共に2年)。この大会の1カ月前に行われた、北信越地区と東海地区の選手で争われる中部日本選手権(福井)のダブルス決勝で、1-2で逆転負けを喫した相手だった。

「あの試合は足がつってしまった。次は絶対に勝つてやろうと」(落合)「負けていたのがモチベーションになった。エースダブルスとして負けてばかりではないけない」(山岸)。第1ゲームは落合が拾って山岸が決めるパターンで立ち上がりに勢いに乗って押し切り、第2ゲームは接戦をものにして借りを返した。

北越は、前日の学校対抗戦で開志国際に3-1と勝利して3連覇。最終日のシングルスでは山岸が4試合で1ゲームも落とさずに完勝。山岸は3冠を達成した。

県予選に続く北信越予選(1月20日、22日、富山)でも北越は全種目で優勝。山岸は県勢史上初の北信越3冠に輝いた。北越は岩手県で3月24日、28日に開催される全国選抜大会に出場する。



決める！
運命の二球
高校バドミントン

開志国際、女王の貫禄 単・複も制して完全優勝

新潟県 第51回
高校選抜大会
兼全国高校選抜大会新潟県予選

女

子は開志国際が学校対抗戦、個人対抗戦ダブルスとシングルス全てを制した。シングルスは1と2位、ダブルスはベスト4を独占。圧倒的な力を見せた。

エースの深井ゆあ（2年）は、「自分はダブルスが不得意で（ペアを組む2年笹川凛に）頼ってばかりなんですけど、絶対勝とうと、2人の気持ちが一一致していました」と、身の上とする粘りのプレーでシャトルを拾いまくり、ダブルスとシングルスと合せて3冠を達成した。

開志国際のメンバーは9のみ出場の水澤祐月もベス深井とペアを組むキャプテ「自分はダブルスメインで、本職は絶対には負けられ国際はいつも一番を目指し全員で勝ち取った優勝です覇権を奪還した学校対抗度目の優勝。女王の風格が北信越予選に臨んだ県勢本文理は準々決勝で敗退し国際は準優勝。ブロック第国選抜大会（3月24日～28日）で、ダブルスでもア、深井はシングルスでも決めた。

開志国際のメンバーは9人。シングルスのみ出場の水澤祐月もベスト8に入った。深井とペアを組むキャプテンの笹川が言う。「自分はダブルスメインでやっているの
で、本職は絶対に負けられなかった。開志
国際はいつも一番を目指して戦っている。
全員で勝ち取った優勝です」

覇権を奪還した学校対抗戦は2年ぶり3
度目の優勝。女王の風格が漂っていた。

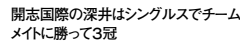
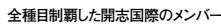
北信越予選に臨んだ県勢2校のうち、日
本文理は準々決勝で敗退したものの、開志
国際は準優勝。ブロック第2代表として全
国選抜大会（3月24日～28日、岩手）に出
場する。また、ダブルスで笹川・深井のペ
ア、深井はシングルスでも全国大会出場を
決めた。

女

て3冠を達成した。

新潟県第51回 高校選抜大会

兼全国高校選抜大会新潟県予選



ダブルス準優勝の西浦優羽(2年、左)と池内暖(1年、右)。第2ゲームは持ち前の運動量でNo.1ペアに食い下がった



学校対抗戦で準優勝した日本文理。2年前から1つ順位を上げた

女子優勝の fighting girls KAMEDA は、特長とするディフェンス力を存分に発揮。2 回戦の大淵丸山 BEANS（新潟支部）との接戦をものにする、勢いに乗った。「上級生がいない中、最初はかなり緊張していました。自分たちのプレーをするのに時間がかかったが、後半になってディフェンスが機能しました。大きな大会で、保護者の前でプレーできて、子どもたちにとってはとても良い経験になりました」と、古山晃ヘッドコーチ。

今大会の目標は優勝だった。キャプテンの坂井志乃巴（4 年）は「うれしいです。みんなでディフェンスを頑張ってオフENSEに切り替えられました」。副キャプテンの平松幸華（4 年）は「チーム一丸となってオフENSEもディフェンスも頑張った結果。5 年生になってもみんなで優勝を目指します」と、笑顔で語った。

男子優勝の希望フェニックスも、準決勝で強豪の BOMBERS に 1 点差で勝ったことで自信をつけ頂点に上り詰めた。「初戦から全力で戦ったから BOMBERS にも勝つことができ、決勝まで行けた。みんなが頑張りました」とキャプテンの大川陸。大川をはじめとして、チーム 15 人中 14 人が 4 年生で、チームワークは抜群にいい。優勝が決まった後、大川を胴上げしたのもそんな仲の良さの表れだろう。「練習好きが集まっているチーム。いい意味でバスケバカ（笑）。それぞれが自分の役割を感じながら練習をやっているんです。自主性があり、主体的で、全員がエースです」と、教え子たちが誇らしげな瀬下優子ヘッドコーチ。

優勝の下馬評が高かった中、元氣いっぱいの 15 人がのびのびプレーで栄冠を勝ち取った。



女子決勝

fighting girls KAMEDA 52 24 中地区ミニバスケットボールクラブ

14 - 6
12 - 10
15 - 3
11 - 5

男子決勝

希望フェニックス 44 33 BADBOY'S

12 - 8
11 - 3
12 - 8
9 - 14



新潟日報杯 第16回

新潟県U10フレッシュバスケットボール大会

女子は fighting girls KAMEDA 男子は希望フェニックスが戴冠

1.28-29

新潟市南区・白根カルチャーセンター／中之口体育館

小学4年生以下の選手で構成したチームによる新潟日報杯新潟県U10フレッシュバスケットボール大会。3年ぶりの開催となり、16回目を迎えた今大会には男女それぞれ16チームが出場し、トーナメント方式で優勝チームを決定。女子はfighting girls KAMEDA（新潟支部）、男子は希望フェニックス（中越支部）が栄冠を勝ち取った。

撮影●星野健一（Office ANDANTE）

渡邊俊介（フリーランス）

文●井上和男（編集部）

